



2023年5月「うつくしま地球温暖化防止活動推進員の会」(県北地区)活動報告

5月21日13時30分から16時まで福島市内のアオウゼで、令和5年度第1回目の研修会と第2回の会合が開催されました。研修会ではLetterNO.24号でお知らせした福島県福島イノベーション・コースト構想推進課主任主査の菅家拓也さんから「福島イノベーション・コースト構想について」また、福島県生活環境部環境共生課主任主査の鈴木聡さんから「令和5年度福島県の地球温暖化対策の取組について」ご説明をいただきました。2題ともうつくしま地球温暖化防止活動推進員の活動に深くかかわる内容でした。

研修会終了後、県北の会で進めてきた「かるた」の制作に関する現状報告と10月1日に福島市環境フェスタが福島市のこむこむで開催されることが報告されました。「かるた」は赤井運営員が参加している絵画教室で、すでに作業が開始されている事や、いくつかの絵札については印刷業者とのすり合わせが行われていることが報告されました。

令和5年度第1回研修会報告

1)「福島イノベーション・コースト構想について」福島県福島イノベーション・コースト構想推進課主任主査 菅家拓也さん

震災と原発事故で浜通り地域を中心に、産業や働く場所が失われ、原子力発電所事故の



講演する菅家さん

収束と併せた浜通り地域の復興を実現するために国家プロジェクトとして進められている「福島イノベーション・コースト構想(イノベ構想)」についてご講演をいただきました。これまで全体像を掴むことはなかなか困難でしたが、今回の講演で浜通り地域の現状とイノベ構想の全体像を知ることができました。浜通り地域の現状については、特に居住者人口の減少が大きく、現在も原発事故以前の水準に戻っていないこと、令和2年度の双葉郡の人口は、平成22年度の22.6%にとどまり、とりわけ避難地域に指定された12市町村での人口減少が大きく、福島第一原子力発電所が所在している双葉町や大熊町では数%にとどまっています。一方で、福島県の製造品出荷額は平成30年に原発事故前の水準を超えており、浜通り地域を中心として、産業の再生が進んでいることが示されました。

イノベ構想では、①廃炉②ロボット・ドローン③エネルギー・環境・リサイクル④農林水産業⑤医療関連⑥航空宇宙の6つの重点分野が位置付けられており、それぞれの分野の進捗状況が紹介されました。例えばエネルギー分野では、浪江町にある「福島水素エネルギー研究フィールド(FH2R)」において、電力需要の調整機能として、クリーンで低コストな水素製造技術の確立を目指した実証が行われ、生み出された水素は、すでに「道の駅なみえ」や「Jヴィレッジ」「あづま総合運動公園」などで活用されていることが紹介されました。イノベ構想は時々報道で耳にしますが、どのような内容で、どのような重点項目がたてられているのか、それが福島復興とどのように関わっていて、どこまで進展し、どこまでを目標とするのかが分かりにく

かったのですが、福島の復興事業の成果が身近なところで活用されていることや、ゼロカーボンなどの将来的な目標にも深く関わっていることがよく理解できました。それと同時に、まだ浜通り地域の復興が途上にあることも理解できる内容でした。



講演を熱心に聞く参加者

2) 「令和5年度福島県の地球温暖化対策の取組について」福島県生活環境部環境共生課主任主査 鈴木聡さん
地球温暖化の現状および福島県が昨年度作成した



講演をする鈴木さん

「福島県の気候変動と影響の予測」、さらにカーボンニュートラルの実現に向けた福島県の取り組み、令和5年度のうつくしま地球温暖化防止活動推進員の活動支援や期待される役割についてご講演をいただきました。「福島県の気候変動と影響の予測」は平成28年度に作成したものを更新したもので、福島県のホームページ（下記のURL）で見ることができます。気候変動に伴うリスクを地球温暖化防止推進活動において伝える時の基礎データとしての活用が期待されます。ご講演ではIPCC第6次報告の基になった気候データを使用して、図1に示すSSP1-2.6, SSP2-4.5, SSP5-8.5の3シナリオにおける2030年、2050年、2100年ごろの20年間の平均気温の予測結果が示されました。凡例の幅が大きいので、地域ごとのデータを詳細に読むことは少し難しいかもしれませんが、今までと同じように化石燃料を使用し続けるSSP5-8.5シナリオの2081年から2100年の平均値で4.4℃昇温することが紹介されました。IPCCの第6次報告では、地球全体の平均気温が2081年から2100年の平均値で5.7℃上昇することが指摘されていて、一見すると福島県の平均気温の上昇量が少ないように思えますが、比較する基準年が異なっており、IPCC第6次報告書の基準年である1850年から1900年の平均気温と比較すると、

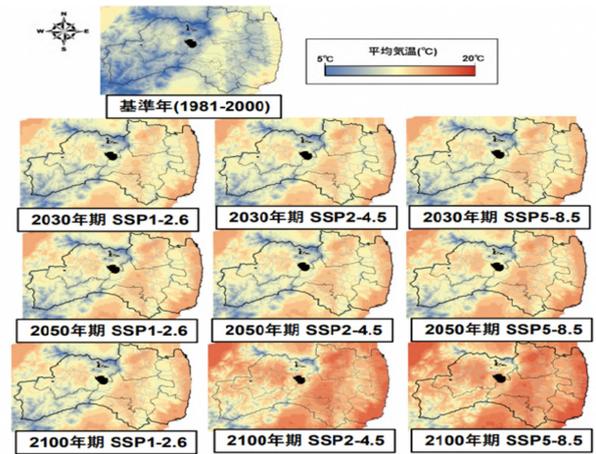


図1 福島県の温暖化予測結果 SSP1-2.6, SSP2-4.5, SSP5-8.5の各シナリオにおける1981年から2000年の平均気温を基準に2030年期[2021-2040年], 2050年期[2041-2060年], 2100年期[2081-2100年]の20年間の平均気温分布

福島市では約6℃もの上昇になることが示されました。福島市の現在の平均気温の平年値は13.4℃、20世紀の地球全体の平均値が13.9℃ですから、福島県の気温は比較的地球の平均気温に近い値になっていて、予測される上昇量もほぼ地球全体の平均値に類似しています。福島県がまとめた報告書では、こうした気候変動予測と合わせて、コメ、モモ、リンゴなどの果樹、水資源、森林、災害、健康などへの影響予測が示されています(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/ontai/fukushima-lccac-climatechange-yosoku.html>)。また、カーボンニュートラル実現に向けた取り組みとしては、4月1日に気候変動適応センターが設置されたことや2050年度カーボンニュートラルロードマップが紹介され、県の施策として、①県民総ぐるみ運動②再生可能エネルギーの最大限の活用③二酸化炭素の吸収源対策の推進④気候変動への適応への推進が柱になっていることが示されました。さらに、令和5年度うつくしま地球温暖化防止活動推進員の活動支援については、若手を中心とした「うつくしまCOOLサポート」を養成することやスキルアップの勉強会を実施すること、さらに推進員の活動機会を創出することが紹介されました。また、機運醸成の必要性から、学校での活動や事業者、県民に向けた事業として「ふくしまゼロカーボン宣言事業」「省エネ診断士」「エコドライブ講師」「うちエコ診断士」の派遣を計画していることも紹介され、盛りだくさんの福島県の施策を知ることができた講演でした。